和本大好き！

和本リテラシーズ

編集○日本近世文学会

VOL.2

2016.7.15

あらゆる領域のヒントが詰まっている
古典籍（和本）をどう読み、理解し、活用するか。
和本教育の実践記録を伝える冊子、第二号！

目次

▼刊行にあたって…02

実践記録❶小学生対象　久保木秀夫（鶴見大学）
「昔の本にさわってみよう！」の工夫と知見…03

実践記録❷中学生対象　井上泰至（防衛大学校）
くずし字授業が開く古典知の世界
――桐蔭学園出前講座に参加して…06

実践記録❸大学生対象　渡部泰明（東京大学）
演劇の授業始末記…08

実践記録❹外国人対象　中嶋　隆（早稲田大学）
UCLA「和本リテラシー」ワークショップ…11

実践記録❺国際シンポ　飯倉洋一（大阪大学）
国際シンポジウム「読みたい！日本の古典籍」報告…14

▼出前授業のあゆみ（二〇一五年度実施分）…16

▼出前授業の実施について…16

▼編集後記…16

ご自由にお持ちください

刊行にあたって

ここでいう「和本リテラシー」とは、広い意味では、江戸時代末までに書写もしくは刊行された古典籍（和本）をどう読み、理解し、そして活用していくかといった、日本古典籍に関わる総合的な能力を指すものです。と同時に、狭い意味では、いわゆる「くずし字」（変体仮名）の読解能力を指します。

昨今、この種の能力はいっそう衰退の一途を辿っていますが、二十一世紀を迎えて、日本の現状が混迷を深めれば深めるほど、〈古典〉の重要性は増していると見るべきでありましょう。〈古典〉は文学だけではありません。あらゆる領域に存在します。さまざまなヒントが詰め込まれている〈古典〉を存分に理解し吸収するために、今こそ「和本リテラシーの充実を」と願わずにはいられません。

このリーフレットは、「和本リテラシー」の実践記録を集積し発信することで、古典もしくは古典籍を学ぶ方はもちろんのこと、教える立場にある方々にも一つの指針（モデルケース）としていただけるように願って発刊されます。

どうか、小さな動きがやがて日本各地で大きなうねりに発展し、老若男女がみな自力で、〈古典〉の豊かさを存分に享受できる日が来ますように。

二〇一五年七月

日本近世文学会　広報企画委員会

実践記録 1 小学生対象

「昔の本にさわってみよう！」の工夫と知見

久保木秀夫（鶴見大学） KUBOKI Hideo

二〇一四～二〇一五年度、鶴見大学では、神奈川県の「大学発・政策提案制度」の採択課題として、神奈川県立図書館との共同で「小学生向け和本レクチャー」という出張授業を実施した。主に小学生の高学年向けに、古い写本や版本、近代活版本といった昔の書物の実物を、自由にさわれるような機会を設け、書物や書物文化、古典や歴史に対する興味や関心を、早い時期から高めてもらうことを目的としたものである。もちろんその根底には、今現在の、人文学をめぐる状況に対する危機感も相当に強くある。

それら実際のレクチャー時の様子などは、国立国会図書館の「カレントアウェアネス・ポータル」№294（二〇一五年一二月、http://current.ndl.go.jp/e1743）で詳述しており、関連ＵＲＬも載せてあるので、適宜ご参照願いたい。ここではレクチャーを重ねていくうちに培われていった工夫や、得られた知見などを簡潔にまとめてみたい。

1 実施内容① 事前レクチャー

1コマ50分の中で、パワーポイントによる20分ほどの事前レクチャーを行い、和本体験に進めていくのを基本形としている。うち前者では、（1）文字と記録媒体の歴史、（2）和本の特徴、（3）稀少さ・重要さ、（4）取り扱い時の注意点、などにつき、クイズを交えつつ説明している。ちなみに（1）などは、持参する貴重書（本物の粘土板文書やパピルスなど）の解説という目的もあるため、最低限（3）（4）だけでも十分か。また打ち合わせ時に小学校側から、児童が習い立ての内容も含められれば、という要望が寄せられることも時にある。もちろんそれは積極的に取り入れた方がよいので、学習内容に即し、こんな書物が大事に伝えられてきたからこそ、今でもそれを習えるのですね、といった話題を加えてみると、より身近に、古い書物を保存し研究することの大切さを、感じてもらえるようである。

くずし字学習に役立つアプリ・Web サイト・DVD・書籍を欄外で紹介します

2　実施内容②　和本体験

次いで、昔の書物を児童自身の手で、自由にさわってもらおうというメイン部分。ここで当然、両図書館の貴重書指定分についての、保存と公開のジレンマという問題に直面する。そこで貴重書に関しては、さわれはしないが、ガラスケース越しにではない形で、間近に見られる、ということにした。それだけでも効果は大きく、多くの児童が、ギリギリまで顔を近づけて観察する姿が見られた。ちなみに一番人気は『解体新書』。これは本当に最強である。一方、自由にさわれる書物としては、教員架蔵の和本類と、私の所属学科の教材用和本類、数十点を充てることとした。選書も試行錯誤を重ね、現時点では、①中世～近世写本類、②近世整版本＋板木・近世木活字本＋木活字、③絵入り整版本、④近代初期整版本・活版本、⑤一枚物・畳物、などのまとまりで配置している。また各机には、教員・司書・アルバイトの大学院生が、一人は付くようにもしている。

選書のポイント　その際、古典文学を研究する立場としては、つい『古今集』や『源氏物語』などの古写本・古版本類をご披露したくもなってくる。が、しかし最初の一～二回で早くも思い知らされたのは、小学生はそんなものには、ほとんど関心を示さない、ということだった。それよりもっと生活感覚として身近な内容、「昔はこんな感じだったのか」「今とそんなに変わらないのか」「昔からこれがあったのか」といった、小学生の今現在の感覚や知識、環境などと比較できそうな、いわゆる雑本類の方が、よほど興味を惹きやすかった。例えば、昔の生活が描かれた絵入り本、地域的に身近な鎌倉の古地図、和装の英語教科書、活版による新聞や鉄道路線図などである。あるいはまたモノとして面白い、豆本（彫りの技術の高さに驚いてくれる）や巻子本（巻きたがる）、透かし入りの本なども好評である。要するに、くずし字が読めなくても、十分に楽しめるような書物が最適らしい、のであった。

事前レクチャーの様子（正面中央は伊倉史人鶴見大学教授）

書物の「古さ」　もうひとつ実感したのは、私などつい、近代（以降）の書物はもう「新しい」からと、選書から外してしまいがちだった。しかし小学生にとって、それらはまだまだ十分「古い」のであり、近世までの書物と区別（差別）したりなどはしないのだった。これはレクチャー内容からは離れた、現実的な

カリフォルニア大学ロサンゼルス校（マイケル・エメリック氏）と早稲田大学の共同開発。
2015 年秋リリース。仮名が中心。フラッシュカード方式で一字一字を覚えるスタイル。

問題としても、かなり有益な発見だった。

保存対策　と言うのも、近代の雑本ならば、今なお安価で入手しやすいからである。この二年間で痛感したのは、どれだけ丁寧に扱ってもらっても、回を重ねればその分、書物は確実に傷んでいく、という事実であった。その対策としては結局、同じ書物を使い続けず、交替させていくほかにない。とすれば自ずと、結構な量のストックが必要となってくる。そこで近代の書物でも十分役に立つのであれば、安価なだけに大変助かるわけである。

和本を手にとって見る児童

役割分担　ついでに事務的な側面についても少し。小学校との事前打ち合わせや配布物の用意、貴重書の運搬などの実務面は、メンバーの図書館司書がすべて担当してくれた。これは大変ありがたいことであり、事務的な負担がない分、教員側も教材の開発や改善、書物の選定などに専念できる。現状、実施日には10名前後で動いており、さらなる効率化を要するが、図書館との協力体制を、すでに計画段階から整えられたのは、レクチャー推進上の非常に大きな強みとなった。教員のみでは、自ずと制限や限界が生じていたに違いなかろう。

和本リテラシーとの関係　最後にこの点、一言すれば、くずし字を学んでもらう前段階で、古い書物そのものに対する関心をまず強めていくのが、より効果的ではなかろうか、とも愚考している。そうして内容に対する関心を掻き立てられれば、自ずと今度は、何が書かれているのか、という関心にも繋がっていき、結果、くずし字を読んでみたい、というモチベーションも一層高まっていかないだろうか。残念ながら本レクチャーでは、くずし字について取り上げる時間的余裕はまったくないが、にも関わらず、書物の内容に興味を持った児童が、自発的に、一生懸命くずし字を読もうとしている光景を、幾度となく確認している。

以上、現在も試行錯誤の最中であるため、雑駁な報告に終始したきらいもあるが、本レクチャーの内容が、和本リテラシーの推進に、少しでも役立つようであれば幸いである。末筆となったが、この二年間、本事業にご理解、ご協力下さった、各小学校をはじめとするご関係の皆様に、あらためて御礼申し上げる次第である。

くずし字アプリ「**変体仮名**」【Android・iOS 対応】

実践記録 2 中学生対象

くずし字授業が開く古典知の世界

――桐蔭学園出前講座に参加して

井上泰至（防衛大学校） INOUE Yasushi

二〇一六年二月一三日（土）朝。横浜市郊外にある私立中高、桐蔭学園へ。学会の和本リテラシー普及活動の一環として、出前講座に参加するためだ。集合したのは、私のほか、小林ふみ子、青山英正、稲葉有祐、福田安典の各氏。それに福田さんのアシスタントとして参加した日本女子大学の学生二名。講座は、同一六日（勝又基・光延真哉・高松亮太・牧野悟資の各氏）・二二日（近衛典子・神作研一・二又淳・真島望の各氏）の計三回、一三クラスを展開した。かくも大規模な形で受け入れてくださった桐蔭学園に、お礼申し上げたい。

委員会内の議論では、中高での啓蒙・普及活動が大切だということになっていたが、そのステージがなければ、絵に描いた餅に過ぎない。その意味で、今回の試みは一つの画期になるだろう。

対象クラスは、中学三年生。学力試験も終わったこの時期こそ我々外部の人間の試みが受け入れられると桐蔭側は見計らって設定してくださった。受け入れ校側の姿勢というものが、講座の成否のかなりを決める。

次に、事前に講座担当者の八割が集合し、意見交換を行った。目的は、共通で教える内容は何かを決めること。桐蔭側からは、クラスによって不公平感の残らないように、という要望があり、これに対応するためだったが、結果、どういう授業をするか、互いにイメージを語り、字母と対応した「くずし字一覧」を配布しての説明と、最後にそれを見ながら生徒の名前をくずし字で書かせるという、共通の出口を確認しあえた。今回は、桐蔭側との折衝から、参加講師全員の事前準備までを仕切った、神作研一委員長（当時）と小林ふみ子さんの力に負うところが大きい。ノウハウについては、直接広報企画委員会にご照会下さい。

私が担当したのは、男子クラス。まず、六つの俳句を生徒に示して、どの句が気に入ったか手を挙げさせ意見を言わせる、個人的に「俳句占い」と呼んでいるものである。

飯倉洋一氏（大阪大学）のチームが開発。2016 年 2 月リリース。頻出仮名・漢字が中心。用例付きの辞書機能＋テストで覚えるスタイル。案内役は本誌でもおなじみ「しみまる」。

花の色とはうすべにか薄墨か　片山由美子

「この句を選ぶ人は芸術家肌ですよね」と「占い」をやりつつ、作者名は伏せておいて、「男性だと軟弱な文学青年系、女性だと綺麗な人が名乗らないと説得力がないかな」と、きわどい発言も中三男子だから許されるか。問題はここからで、「うすべに」と「薄墨」の表記を書き分けたテクニックを解説しつつ、これはアルファベットでは無理だとして、漢字（真名）から仮名が派生したことに進み、くずし字の解説へと移行する。

後半は、正岡子規の絶筆三句を、字母を確認しながら一緒に読み、仰向けで書いた字であること、字のバランスと筆勢、「佛」の字の子規らしさなど、字の身体性と不即不離の芸術性についてふれた。子規が死の直前だったこと、圧倒的な欧米語の侵攻に対し、新しい日本語を生み出すことで対抗する志のあったこと、でも俳句では、事務的な助動詞「た」に集約されない、「つ」「ぬ」「たり」「り」「き」「けり」の豊饒を大切にしたことにも。桐蔭学園の川妻篤史先生からは以下のようなコメントをいただいた。

――生徒たちは日々活字の形でしか古典と接することがありません。実物の和本を手にしたときの生徒たちの驚きの表情は、世界がひとつ広がった証と言っていいと思います。生徒たちは、くずし字を通してその文字を書いたり引き継いだりしてきた人々の生活に思いを馳せることができました。貴重な機会をありがとうございました。――

授業は、百人百通りのやり方があるだろう。ただ、個人的な経験を言わせてもらえば、中学二年から、ある塾で古典文法の初歩を学んだのは京大国文の院生の方々で、学問の現場から立ち上がってくる一言が必ずあった、大谷雅夫・木田章義両先生の授業は今も鮮烈に覚えている。特に想起されたのは、手をぬかず、生徒を信頼して語ってくださった、先生方の面影や声のひびきである。要は、ルーティンをこなすだけではないところに、我々がお邪魔する意味があると思うのである。

そして、教える側は、そういう「知」のバネについての問いかけを自らになさざるを得ないという意味で、大変勉強になることを強調して、特に若い研究者の一層の参加を、願うものである。

授業風景

くずし字学習支援アプリ「**KuLA（クーラ）**」【Android・iOS 対応】

実践記録 3 大学生対象

演劇の授業始末記

渡部泰明（東京大学） WATANABE Yasuaki

「演劇」の授業を行った。二〇〇六年度から二〇一五年度までの一〇年間、駒澤大学文学部において非常勤講師として勤務した「国文学特講Ⅲ」の通年の講義である。その報告を行う。演劇のど素人の稿者がこれを担当した摩訶不思議な経緯については、割愛する。NODA・MAP 取締役（音響・演出補）・多摩美術大学教授の高都幸男氏の指導を得たことを感謝とともに記しておきたい。

なお当該講義の履修者は、八〜三二名、平均二〇名強で、時に演劇サークル所属者も交じるが、未経験者が大多数である。暗中模索で始めた授業であったが、高都氏の指導のもと徐々にノウハウが蓄積し、四、五年目には一応カリキュラムらしきものが出来上がった。授業は次の**1**〜**3**の三つの柱で構成される。

1 ワークショップによる身体的コミュニケーションの訓練

ワークショップ（以下、WS）は、次の①〜④のステップを踏んでなされる。準備運動ではありながら、この特殊な形態の授業に学生が主体的に参加するための重要な意味をもつので、少し詳しく説明したい。

①名前を覚え、呼び合う

全員が全員の名前を反射的に言えるようにする。苗字は社会性を背負うので、姓ではなく、名で呼ばせる。雅号・俳号の類、と理解させる。稿者もタイメイと名乗り、参加した。

覚え方は以下の通り。まず円陣を組み、みな中央を向いて立つ。全員が名乗った後、一人ずつ、自分、右隣の者、左隣の者の順で名を言う。ABCDEと五名が並んでいるとすると、CはCDBと名を言うことになる。必ず自分の名から言う。これを順に全員行い、一回りしたところで、次に、Cは、CDEBAという具合に、自分、右隣、その右隣、左隣、その左隣の名をいう。つまり自分＋左右二人分の名を言う。さらに一周後、自分、右隣三人、左隣三人分の名を言う。全体の人数にもよるが、二〇人前後だと、四人分まで行う。その後、一人ひとり、全員

http://people.ucalgary.ca/~xyang/kana/kana.html 楊暁捷（ヤンショオジェ）氏（カルガリー大学）作成。
2字以上の仮名を続けて書いた連綿の筆順を動画で教えるサイト。小テスト 15 問もあり。

の名を言わせる。最初の者は詰まったりもするが、一まわりしてほぼ全員の名がすぐに出るようになるまで、おおよそ三〇分程度である。この時点で、場の空気および身体感覚が、当初とかなり異なって来ていることを自覚させる。

②視線を合わせる

円陣はそのままに、ボール投げを行う。柔らかいビニールボールを他者にゆっくり投げ渡してゆく。その際、投げようとする相手にアイコンタクトをしてから投げる。アイコンタクトをしないとしばしば取り損なうことを、実感させる。次に、ABCの三者にこの順でボールが転送される場合、BはCに投じる際、自分に投げよこしたAの名を言いながら投げる。いっそうアイコンタクトが必要になるとともに、演技の基本が、意識と身体を一端切り離すことから始まる事を自覚させる。

③触れ合う

例1：数人で写真（上）のごとき電車をつくる。発話を禁じ、全員目を閉じる。ただし電車最後尾の者Aのみ目を開けてよい。このAが、進め、止まれ、右（左）に曲がれ、の合図（両肩を引けば止まれ、とかを最初に決めておく）をすぐ前の者に送り、その合図を順に一番前まで伝達して電車を動かす。

例2：写真（下）のごとく円陣で向き合い、Aが目を閉じ、Bがアイコンタクトを行って向かいのCに意志を伝達した上で、Aの両肩に手を添え、Cに向けて送りだす。Cは見えぬまま歩いてくるAの両肩前部を押さえて受け止める。交替して、

「③触れ合う」の実施風景

連綿（れんめん）の筆順を動画で教えるWebサイト『**動画・変体仮名百語**』

AがCをDに向けて送りだす。

④呼吸を合わせる

集団でタイミングを計る作業である。例：四名ほどで、それぞれがまずランダムな方向に歩き続ける。発話は禁止。ストップの合図を出して、その場で止まらせる。一呼吸おいて、任意の一人（事前に決めない。以下同）が三歩程度動いて、止まる。また一呼吸おいて、次に任意の二名が、同時に同様の動きをする。これを三名、四名と順次増やしてゆく。全員が同時に動いて同時に止まれれば、終了。誰も歩き出さなかったり、二名のところを三名が動き出したりした時にはすぐに中止させて、最初からやり直させる。

右には代表的な例を挙げたが、この他、①～④を様々な形で混合させた三〇種類ほどのWSを行う。徐々に即興的な場面づくりなど、演劇性を高める。例えば、五人であれば、事前に1～5までの番号を本人だけが承知する形で各自に与え、それを力関係の順位として、「解散目前の劇団の楽屋」などのテーマだけを与えて即興的に演じさせる。他の役者がどの順位なのか、推理しながら自分のキャラクターを作り上げることになる。このほかできるだけ授業ごとに違うWSをやらせるが、①は毎回行う。

2　古典作品の翻案の試み

古典作品を、1逐語訳、2意訳、3翻案の順で現代語にさせる。1忠実に現代語に置き換える、2それを現代語として自然な言い方に直す、3場面を設定し物語化する、のである。これについては、蔦尾和宏・平野多恵・中野貴文氏との共著『大学生のための文学レッスン 古典編』（三省堂、二〇〇九）参照。数回の練習の後、3を戯曲形式にさせる。

次に古典作品の中から一つの文章をこちらで選び、これを戯曲化させる。夏休みの課題とすることが多い。素材となる作品は、主人公が明確で、劇的な事件が起きるものを選ぶようにした。これらを相互批評した上で、上演台本を投票で選ぶ。一〇人程度で一グループにする。三〇人なら三公演となる。

3　戯曲の上演

演出者・配役を各グループで決め、授業最終日に、教室にて作成した戯曲を上演させる。準備に約一ヶ月をあてる。演出・舞台装置・衣裳・小道具・音響効果等（照明効果は教室の照明以外は使えない）すべて基本的に学生の自主性にまかせる。

この授業の総括・評価はいまだできないでいるが、現在勤務校で、この授業の方法をもとに、教職のための模擬授業をさせる講義を行っていることを付言しておく。

荒俣宏の和本談義、江戸川乱歩旧蔵書をめぐる渡辺憲司立教大名誉教授の軽快なナビゲート、
中野幸一早稲田大名誉教授の和本礼讃など、和本の尽きない魅力が満載。本編85分＋特典100分。

実践記録 4 外国人対象

UCLA「和本リテラシー」ワークショップ

中嶋 隆（早稲田大学） NAKAJIMA Takashi

カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）とサンタバーバラ校（UCSB）で、「和本リテラシー」ワークショップをやりたいから、そのコーディネーターをやれと、UCLAの教員マイケル・エメリックさんに依頼されたのは、一昨年の秋のことだった。この企画は、ユニクロ創業者、柳井正氏の寄付金（The Tadashi Yanai Initiative for Globalizing Japanese Humanities／以下、柳井イニシアティブと略称）によって運営されるということである。柳井イニシアティブは、日本学研究のグローバル化を目的としたもので、UCLAと早稲田大学の新たな連携を通じて様々な企画を進めている。ワークショップは、二〇一五年八月三一日から九月四日にかけて行われた。来日されたマイケルさんと話し合い（雑談程度ではあったが）、次のような方針で、この企画にのぞむこととなった。

（1）変体仮名の学習時間はとらない。
（2）講師は、特定の出身大学や学会にこだわらずに人選する。
（3）受講者は、UCLAのみならず、広く欧米から募る。

和本を読むトレーニングをしないという方針が奇異に思われるかもしれないが、これには理由があった。早くから変体仮名読解アプリを開発するというアイデアを口にされていたマイケルさんに、早稲田大学が協力して、ワークショップ開講時には、すでにこのアプリが完成し、受講者は変体仮名を習得しているはずだったのである。しかし、日本語版・英語版変体仮名アプリが完成したのは、二〇一五年秋のこと。ゲーム感覚で変体仮名が覚えられるこのアプリの評判は上々だが、こういう事情があって、このワークショップでは変体仮名の学習時間を取らなかった。が、かえって時間的余裕が生じて今回のワークショップの内容を多彩に展開することができた。

マイケルさんと相談のうえ、講師は青山学院大学・小川靖彦さんと国文学研究資料館・海野圭介さんにお願いした。私が近世を担当すれば、お二方の得意な分野をあわせ、古代から近世

ブルーレイ「**Documentary 和本—WAHON**」（東京古典会企画協力、629inc. 制作、2014）

まで、巻子本・写本・版本をカバーできる。これで「和本」について、「書物学」という通時軸をもった観点からワークショップできることとなった。さらに、三人の講師はみな世代が違っている。ワークショップの最終日に研究の原体験を話す時間を持ったおりに、「三人の話が三様で実に面白かった」という感想を述べられたのは、UCLA教員のトークィル・ダシーさんである。受講者は、二七名。米国各地はもとより、カナダ、イタリアからの参加もあった。

マイケル・エメリックさんの開会あいさつ

ワークショップは、以下の日程で実施された。（以下、敬称略）

8月31日（月）①小川（基礎編）②海野（基礎編）
9月1日（火）③中嶋（基礎編）④小川（実践編）⑤海野（実践編）
9月2日（水）ロスからサンタバーバラに移動　⑥中嶋（実践編）⑦小川（応用編）
9月3日（木）⑧小川（応用編・続）⑨海野（応用編）
9月4日（金）⑩中嶋（応用編）⑪総括と参加者の感想

次に、各講師の講義内容を概略する。

○小川靖彦

【基礎編】巻子本入門（1）巻子本の基礎知識の説明（2）桂本万葉集（二玄社の日本名筆選をカラーコピー）を巻子本に仕立てる。（3）巻子本で万葉集を読むのと冊子本で読むのと何が違うかについて討論。**【実践編】**巻子本調査法（1）巻子本の書誌の取り方や、博物館・美術館に展示された巻子本の見方について説明。（2）古写経（敦煌写経、奈良朝写経、平安写経）の複製を使って、寸法の計測、熟覧、至近焦点スコープ、デジタルスコープなどによる観察を行う。**【応用編】**書物の内容と外形の関係（1）平安時代の調度本における書と内容の関係についての分析①同じ筆者　源　兼行による桂本万葉集と高野切第二種を透写してその違いを比較する。②元暦校本万葉集の書における、連綿と放ち書きのシステムについて記録・分析する。（2）日本の書物文化と書き文字の分析を踏まえて、日本の書物文化と書き文字の関係について討論する。

○海野圭介

【基礎編】中世写本の姿と形（1）書物の形態の歴史的変化と

テキストは元禄15年（1702）刊本。江戸の人の気分で、くずし字ごと名作を楽しむ試み。
同シリーズには、他に『百人一首』『徒然草』『東海道中膝栗毛』がある。

作品内容の相関について考察。具体的には、『方丈記』古写本の形態的変化がどのような意味を持っているのか、という点を中心に、他の資料と比較しつつ考える。（2）古典籍の複製本を見ながら、写本の姿と形について観察。（3）写本の形態の観察から理解される古写本の社会的位置と機能などについて討論。**【実践編】**（1）写本書誌の取り方についての説明。（2）粘葉装を体験する。**【応用編】**書物の運命（1）中世以前に調整された古写本がその後に辿った道筋を、①転写、②裁断、③公開、④集積の四つの視点から考える。具体的には、①書物の転写の目的と背景及び形態的側面の変化、②古筆切という独自の展開、③写本が刊行されることの社会的意義と背景、④書物が集積され文庫となることの意義とそれを対象とした近年の研究について述べる。（2）古筆切資料を見ながら、写本の姿と形、料紙の質感、文字の形や紙面への墨の乗り方などについて観察。（3）日本の古典籍とその形態（書誌学的側面）からどのような研究テーマが生まれ、それが日本文化を考える際にどのように作用するのか、などについて討論を行う。

○**中嶋　隆**

【基礎編】近世版本入門（1）版本の基礎知識（刊印修・匡郭・埋木・かぶせ・紙等々）の説明。青裳堂『出版文化　古板本手鑑』の春日版・高野版・五山版の零葉と古活字版の零葉とを比較。（2）版本と近世写本について、版本が商品化した結果、近世に大量に生産された写本にどういう変化が起こったかについて討論する。**【実践編】**（1）版本書誌の取り方の説明。（2）和綴じ（四ツ目綴じ）を体験する。マイケルさんの準備した黄表紙『的中地本問屋』カラーコピーと表紙を製本。**【応用編】**（1）『日本永代蔵』森田版・西沢版（現物持参）を例に、異版について講義。（2）浮世草子の江戸版と上方版（現物持参）の比較（3）元禄期版本文化の多様性について、書物・抄物・俳書・重宝記・仮名草子・浮世草子・好色本・春本等々が江戸時代文化に及ぼした影響について討論する。

総じて、巻子本や粘葉装、和綴じを体験するワークショップや古筆切・写本・版本（好色本・春本を含む）などの実物を見るレクチャーの評判が良かった。「モノ」から始まったワークショップを「知」のレベルに高めることが今後の課題となろう。

巻子本作製中のＵＣＬＡ院生

中野三敏著『**くずし字で「おくのほそ道」を楽しむ**』（角川学芸出版、2011）

実践記録
5
国際シンポ

国際シンポジウム「読みたい！日本の古典籍」報告

飯倉洋一（大阪大学）　IIKURA Yoichi

二〇一六年二月一七日、国際シンポジウム「読みたい！日本の古典籍――歴史的典籍の画像データベース構築とくずし字教育の現状と展望――」が、大阪大学文学研究科・国文学研究資料館・科研挑戦的萌芽研究「日本の歴史的典籍に関する国際的教育プログラムの開発」（代表者　飯倉洋一）の主催、日本近世文学会の後援で開催された。場所は大阪大学豊中キャンパス。内外からお招きした八組の方の発表と、総合討論が行われた。本シンポジウムは、日本語歴史的典籍の画像データベース化および世界の和本リテラシー教育の現状について情報交換をし、和本リテラシーに関する国際的教育プログラムの開発について議論することを企てたものであったが、所期の目的は十分に達せられたように思う。海外をふくめ各地から一二五名の参加者が、熱心に聴き入り、活発な討論を行った。

トップバッターは山本和明氏。三〇万点の画像データベース構築を目指す国文学研究資料館（以下、国文研）の「戦略の現在」を語った。タイトルは異なるが本文内容が同じテキストの著作コントロールを行える国文研が古典籍ポータルサイトを目指していること、原典のままの用語検索や、古典籍ＯＣＲの研究を進めていること、検証可能な人文学の構築を目指して、論文等にＤＯＩ（Digital object identifier ／ Web 上の電子文献と一対一に対応しているコード）の記載を推奨していくこと、などの報告があった。次いで、中西一郎氏（京都大）が、古地震研究を進めていくには古文書・古記録の解読はもちろん、先学の地震研究ノートを読むためにも、くずし字解読能力が必要であることを報告された。三番目の矢田勉氏（大阪大。現東京大）は、変体仮名の文字コード標準化について説明され、数年後には unicode への登録がなされるだろうと見通しを述べられた。かつて中野三敏氏が『和本のすすめ』（岩波新書）の中で、「携帯メールに変体仮名のフォントを入れて」と述べられたことが実現するのである。

四番目の橋本雄太氏（京都大学院生）は、我が科研チーム

の開発したくずし字学習支援アプリ〝KuLA〟（クーラ）のデモを行い、会場を沸かせた。くずし字学習への敷居を低くし、くずし字学習者のコミュニティを作るのも目的であると力説したが、本アプリについては、その後複数のメディアで紹介され、公開一ヶ月で一万ダウンロードを突破するなど、想像以上の拡がりを見せている。

五番目の金時徳（キムシドク）氏（ソウル大）は、欧米は浮世絵から日本研究が始まり、中国韓国は浮世絵が嫌いで交流史に関心が強いという興味深い指摘を枕に、漢字の草書（そうしょ）・行書（ぎょうしょ）の判読ができるくらいの教育プログラムの開発が必要と強調した。六番目のユーディット・アロカイ氏（ハイデルベルク大）は、ドイツにおける日本学科の歴史の紹介から始め、くずし字を含めた日本古典教育の主な課題と実践について報告された。七番目のラウラ・モレッティ氏（ケンブリッジ大）は、自身が主宰されている総合的和本リテラシーのサマースクールプログラムを具体的に紹介。字形を連想させる絵とともに憶えるのが外国人にとっては憶えやすい方法だと報告していたのが印象的だった。また国際的な和本リテラシー教育の課題として日本人と外国人の相互協力などを挙げた。

国際シンポ総合討論の模様

トリとなったUCLA図書館のトッド・グラポーン氏・バイアロック知子氏は、膨大なデータを俯瞰（ふかん）的に捉える新たなデジタルヒューマニティの方法を提唱するとともに、それを支援する図書館の役割について、UCLAでの試みを事例報告しつつ述べた。

以上を踏まえた総合討論では、ITと人文学をいかにして繋げるかという課題が浮き彫りになったという印象を個人的には受けた。翌日の午前も海外からのゲストに再集合していただき、国際的な和本リテラシー教育について熱い議論を交わしたのであった。

くずし字学習支援アプリ "KuLA" 起動画面

堀川貴司（ほりかわたかし）著『**書誌学入門　古典籍を見る・知る・読む**』（勉誠出版、2010）

▼出前授業のあゆみ（二〇一五年度実施分）

◆和洋九段女子高校（高三）
二〇一五年一一月四日（水）
神作研一「古典の〈カタチ〉―江戸の本を知る・さわる・楽しむ―」

◆桐蔭学園中学校（中三）「昔の文字を読んでみよう」
①二〇一六年二月一三日（土）
青山英正・稲葉有祐・井上泰至・小林ふみ子・福田安典
②二〇一六年二月一六日（火）
勝又基・高松亮太・牧野悟資・光延真哉
③二〇一六年二月二二日（月）
神作研一・近衛典子・二又淳・真島望

◆名古屋大学教育学部附属中学校（中一）
二〇一六年三月一五日（火）
加藤弓枝・三宅宏幸「くずし字を読んでみよう」

▼出前授業の実施について

日本近世文学会では、くずし字の読み方や和本を知っていただく一助として、学会員を講師とした出前授業を実施しています。主たる対象は小学校・中学校・高校。期日・時間等はご相談に応じます。講師派遣に関わる諸費用は、原則として学会が負担します。左記アドレスまで、どうぞお気軽にお問い合わせ下さい。広報企画委員会【E-mail:koho@kinseibungakukai.com】

編集後記

▽学会としての初めての試みである「出前授業」は、幸い多くの方々のサポートを得て、力強くスタートした。あらゆる領域に古典があり、その古典こそ〈知〉の宝庫であることを、（大学生だけでなく）児童や生徒たちに粘り強く伝えていきたいと改めて感じている。▽本号には五名の方々に寄稿していただいた。久保木稿は小学生向け和本レクチャーの実践報告、井上稿は桐蔭学園における出前授業報告、渡部稿は演劇を通して大学生へ古典を〈ひらく〉試み、中嶋稿は北米での和本リテラシーワークショップの開催報告、そして飯倉稿は国際シンポの開催報告である。くずし字アプリが開発され、ゲーム感覚でくずし字を楽しむ環境が到来しつつある。さらなる次のステップへと夢は広がる。▽編集は、広報企画委員会和本リテラシー部門の宮本祐規子（日本女子大学〈非〉／チーフ）・神作研一（国文学研究資料館）・山田和人（同志社大学／副委員長）・柳沢昌紀（中京大学／委員長）が担当した。▽本誌は第三号（二〇一七年七月刊予定）まで紙媒体で刊行する（既に第一号と本号は学会HPでWEB公開中）。関係各位のいっそうのご支援とご協力をお願いしたい。

（柳沢昌紀）

『和本リテラシーニューズ』vol.2
発行：2016.7.15　編集：日本近世文学会
公式HP● http://www.kinseibungakukai.com/
印刷所：笠間書院　デザイン：笠間書院　西内友美

しばのすけ
和本が好物な✕妖精。
自称しみまるのライバル。
くずし字が読めない。
（実はちょっと読みたい）
特技は飛ぶこと。